2025年度　埼玉医科大学短期大学

看護学科　学校推薦型選抜Ⅱ期
小　論　文

問題用紙　1枚

答案用紙　1枚

無断転載・複製を禁ず

次の文章は、『現代語訳　論語と算盤』（渋沢栄一　著、守屋　淳　訳。ちくま新書）の第２章「立志と学問」の抜粋です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

わたしは十七歳のとき、武士になりたいという志を立てた。というのは、その頃の実業家は、百姓とともに賤しいとされ、世の中から人間以下の扱いを受けて、歯牙にもかけられない有様だったからだ。一方で家柄というものがとても重視され、武士の家に生まれさえすれば、知識や能力のない人間でも社会の上位をしめて、好きなように権力をふるうことができた。わたしはこれがとてもシャクにさわり、同じ人間として生まれたからには、何が何でも武士にならなくてはダメだと考えたのである。

そのころ、わたしは中国古典の学問を少々修めていた。その知識を活かして『日本外史』などを読むにつけ、政権が朝廷から武士たちの手に移った経緯がはっきりわかるようになっていった。ここから憤りのような感情も芽生えてきて、低い身分で終わるのがいかにも情けなく感じられ、いよいよ武士になろうという気持ちを強めていった。

しかしその目的は、武士になってみたいという単純なものではなかった。武士になると同時に、当時の政治体制をどうにか動かすことはできないだろうか――今日の言葉をかりていえば、政治家として国政に参加してみたいという大望を抱いたのであった。そもそもこれが故郷を離れて、あちらこちらを流浪するという間違いをしでかした原因であった。こうして後年、大蔵省に出仕するまでの十数年間というものは、わたしの今日の位置から見れば、ほとんど無意味に空費したようなものであった。今、このことを思い出すたびに、なお痛恨の思いにたえない。

白状してしまうと、わたしの志は、青年期においてしばしばゆれ動いた。最後に実業界で身を立てようと志したのが、ようやく明治四、五（1871～72）年の頃のことで、今日より思い起こせば、このときがわたしにとっての本当の「立志」―― 志を立てることであったと思う。

もともと自分の性質や才能から考えても、政界に身を投じることは、むしろ自分の向かない方角に突進するようなものだと、この時ようやく気がついたのであった。それと同時に感じたことは、欧米諸国が当時のような強さを誇った理由は、商工業の発達にあることだった。現状をそのまま維持するだけでは、日本はいつまでたっても彼らと肩を並べられない。だからこそ、国家のために商工業の発達を図りたいという考えが起こって、ここで初めて「実業界の人になろう」との決心がついたのであった。そして、このとき立てた志で、わたしは今に至る四十年あまりも一貫して変わらずにきたのである。

真の「立志」はまさしくこの時であった。

思うに、それ以前に立てた志は、自分の才能に不相応な、身のほどを知らないものであった。だから、しばしば変更を余儀なくされたに違いない。それと同時に、以後に立てた志が、四十年以上通じて変わらないものであったところを見ると、これこそ本当に自分の素質にかない、才能にふさわしいものであったことがわかるのである。

しかし、もし自分に、自分を知ることのできる見識があって、十五、六歳の頃から本当の志が立ち、初めから商工業に向かっていったとしよう。そうであったなら、現実にわたしが実業界に足を踏み入れた三十歳頃までに、十四、五年という長い年月があった。その間に商工業に関する素養をもっともっと積むことができたに違いない。かりにそうであったとすれば、あるいは実業界における現在の渋沢以上の渋沢が、生まれていたのかもしれないのだ。しかし残念ながら、青年時代の見当違いなやる気で、肝心の修養すべき時期をまったく方向違いの仕事でムダに使ってしまった。（以下省略）

（『現代語訳　論語と算盤』（渋沢栄一　著、守屋　淳　訳。ちくま新書）より。一部改変）

問１　渋沢栄一の「立志」について、この文章からわかることを150字以内でまとめよ。

問２　「立志」と「学問」の関係について、問題文中の「素質」と「修養」の２つの言葉を必ず用いて、あなたの考えを300字以内で述べよ。

無断転載・複製を禁ず